

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2023 年 6 月 1 日 発行
(通巻 497 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 94

- ・新版「武蔵野の歌が聞こえる」 (1)
- ・配役、スタッフ、演出の言葉 八木澤賢 (2)
- ・誰でもできる朗読教室 長谷川葉月 (3)
- ・われらいずこより⑭稽古場建設と映画「同胞」 (4- 6)
- ・ハトノスの活動について 青木文太郎 (7)
- ・おしらせ・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987

新版「武蔵野の歌が聞こえる」 無事上演できました

合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」は現代座のある小金井を含めた武蔵野一帯の郷土史を扱った作品でした。

◆百姓が自力協同で立ち上がった貴重な歴史

江戸時代中頃、元禄大地震、宝永の大地震、富士山の噴火、さらに気候の寒冷化に襲われ、農業は壊滅的な打撃を受けました。江戸幕府の第八代將軍となつた徳川吉宗は国土開発の役に大岡忠助を任命し、不毛の大地と言われる武蔵野一帯の開拓を目指します。けれど役人の指導では10年たつても実現できません。大岡忠助は役人主導を断念。武蔵国押立村の名主・平右衛門に農民自身による開拓を呼びかけ

ます。平右衛門は相次ぐ災害で郷里を追われた農民を集め、自分たちで協同して生きる道筋を準備し、「病人も高齢者も子供も、共に生きて行くことのできる村」づくりを支援します。こうして武蔵野一帯に82の協同の村が実現しました。

◆もつと手軽に上演できないか

現代座は2010年から市民と協力して、こうした史実を掘り起こし、2014年に作曲家福沢達郎と協力して合唱構成劇を創作しました。それから毎年公演を重ねてきましたが、この6年間はコロナ禍のため公演出来ませんでした。コロナも治まってきたので、この際、協同の歴史を広く知ってもらうために、もつと様々な集いや学校へも気楽に出かけて行ける作品にしたいと、企画会議で話し合われました。

合唱構成劇は上演時間2時間に及ぶ大作で、これを手軽な朗読劇にまとめるのは大変です。それでもなんとか合唱朗読劇として仕上げました。ピアノは新井紀子さんが演奏を引き受けてくれました。

◆とにかくここを出発点に

公演は5月26日(金)から28日(日)までの3日間、6ステージで、集まってくださった方は282人。上演時間は予定通りの50分でした。

「とても良かった」というアンケートがたくさん寄せられました。改めて以前の2時間版を観たい、「現代座の特徴であるホッとする場面も欲しい」などの声もありました。



【写真上・A班の舞台より 写真下・B班の舞台より】撮影：山本幸則



◆新しい出演者の参加

A班、B班の2チーム

これからの現代座の活動を考え、
 りました。男女の割合が違うので、
 ります。霧囲気もやり方も違ってくる。
 同いものを創らなくてもいい、そ
 れぞれの個性のある芝居を創り上
 らおうとの提案があり、新たに5
 げようという方針で、稽古を始め
 人の俳優が参加してくれることに
 ました。

なりました。

そこで5人のチームを二班つく

A班



くわしま よしあき
 桑島 義明



うえむら はる
 上村 遙



あずま しか
 東 志野香



きのした みちこ
 木下 美智子



やぎ こうじ
 八木 浩司

ピアノ演奏



あらい みちこ
 新井 紀子

ピアノの生演奏と合唱・朗読・芝居でつづる
新版 武蔵野の歌が聞こえる

B班



くろざわ よしゆき
 黒澤 義之



はせがわ ほづき
 長谷川 葉月



にしやま けいすけ
 西山 啓介



まつもと えみ
 松本 栄美



まるやま なつほ
 丸山 夏歩



◆東京都府中市「郷土の森博物館」に武蔵野新田開拓のリーダー川崎平右衛門の像が建てられている。

【スタッフ】

作 木村 快

音楽 福沢 達郎

構成／演出 八木 澤賢

演出助手 青木 文太郎

舞台スタッフ 木下 敬志

照明 渋谷 博史

ビデオ撮影 桑原 重美

写真撮影 山本 幸則

制作 NPO 現代座

協力 川崎平右衛門顕彰会

” ワーカーズコープ

東京三多摩山梨事業本部

今回の上演に際して、私ははじめ、企画会議
 の場で半ば義務的に「この演目はビデオ上演は
 やっているが久しく公演としては行ってない
 し、そろそろ上演しないといけないのでは」と
 口に出し、「やりましょ、やりましょ、できるで
 きる」と、いつものように無責任に現代座のメ
 ンバーに話しかけました。そんなふうが始まっ
 たこの企画ですが、台本を読み進めるうちに「当
 時の歴史的背景は、現代に生きる我々の状況と
 たいして変わらないな……」ということも思い
 始めていました。

そこで、構成を見直して、今感じているテ
 マを絞って作品づくりを進めよう、この「武蔵
 野の歌が聞こえる」には、地球という舞台の上
 で生きる人間の普遍性とこれからの未来に生き
 るヒントがあるのでは（大げさですけど）と考
 えを膨らませていくことに……。

現代座メンバーとあだこつだと稽古を進め、
 どうにかこうにか無事に開演を迎えることがで
 きました。50分程度の小さい公演（休憩はあり
 ません）ですが、劇場で同じ時間を過ごしてい
 ただけのことに感謝申し上げます。武蔵野に生
 きた無名の農民百姓たち先人に思いを馳せつつ、
 NPO 現代座もどうにかこうにか未来に向かっ
 て進んで参りたいと思います。



演出 八木澤賢

「誰でもできる朗読教室」

長谷川葉月

4月26日(水)と27日(木)の2日間にわたり「誰でもできる朗読教室」2022年11月期生発表会がありました。今回は発表者が23人という大人数で、そのうちの6名が初参加です。今回は嬉しいことがたくさんありました。

まず一つ目は、3年ぶりにお客様を呼べたことです。コロナ下での発表会は4回ありましたが、会場が密になることを避けなくてはならないので、いずれも受講

生同士が聴き合う内輪の会になっていました。みんなも久しぶりにお客様の前で朗読するので、随分と張り切っていたと思います。1日目は26名、2日目は29名のお客様にご来場いただきました。

二つ目は、朗読教室始まって以来、初めて地下の大きいホールで発表会をしたことです。「いつもの3階の小ホールから場所を変えて、大きな会場だからたくさん人を呼べるよ」と、私がみなさんに伝えた日、喜び半分、不安半分、といった反応でした。やはり、自分の声が必要な会場で届くのが一番の心配だったようです。「これはまず地下ホールで練習してみないといけないな」と思って、会場で練習してみないと

外にも「先生、蛍光灯のあたりが暗くて、文字が読みにくいです」の訴えが…(そこですか問題!).

「なるほど、たしかに暗いです」ということで、急遽LEDを設置してもらいました。即日対応、ありがとうございます。

さて、自分たちの声があまりに違う響き方をするので、1回目の練習では不安を覚えた

人が続出でした。どうして自分の声が届かないのか確かめようと、声がよく通る人が朗読しているときに隣に行くと、どのくらいのボリュームで声を出しているのかを確認する一幕もありました。こういう一大事を控えて、みんなが協力したり、助け合ったりする姿をたくさん見ることができて、「ああ、仲間がいるというのは幸いだな」と思いました。一方、素舞台では寂しいだろうと、照明の八木浩司さんが、日々居残って舞台美術まで作ってくれたり、出入りしやすいように段差をなくしてフラットにしてくれたり工夫をしてくれました。

今期の特徴は、年若い方が何人も受講してくださいましたことでした。三世代が並んで学ぶという機会はありませんので、お互い良い刺激になったのではないのでしょうか。物語の襞を読み込んで表現する年長者の朗読には説得力があり、若い方のイキイキした声に

元気をもらったり、子育て中の方は、間をあげながら語りかける朗読がとても上手です。これからも伸び伸びと声に出す事を楽しんでほしいと思っています。



4/26(水)に朗読発表した「2022年11月期 水曜教室」(後列左より)環笑子、手塚修、小野寺優子、中山晴美、本田典子、高嶋悦代、江花幸子、八木浩司(照明)(前列左より)井上照美、井上尚子、長谷川葉月(講師)、尾花はるみ、佐藤忍



4/27(木)に朗読発表した「2022年11月期 木曜教室」(後列左より)渡邊翔哉、五味孝宏、田島千鶴子、八木裕子、飯田恵理、田中ヒロミ(前列左より)野本ゆうこ、古明地節子、早乙女裕子、長谷川葉月(講師)、浜崎小枝子、今井治江



出演者の控室を作らずに客席に座ってもらうようにしたら、後から来たお客様が座れないという困った場面もありました。反省点です。

木村ノート◆われらいずこより来たる第3部
⑭ 稽古場建設と映画「同胞（はらから）」

木村 快

前回までの記述

【第1部】日本新劇史・資料からのまとめ

- ①・レポート81号 1950年、新劇運動の分裂
中間派は「ヴェリテ・せるくる」を設立。
- ②・レポート82号 1951年、新制作座の発表
ヴェリテ解散。真山、草村、槇村で新制作座。
- ③・レポート83号 1954年、庶民の新劇を標榜
労働組合関係者の支持で全国公演が始まる。

【第2部】活動に参加した木村快の視点から

- ④・レポート84号 1959年(1)特別研究所開設。
- ⑤・レポート85号 1959年(2)巡演活動の実態
- ⑥・レポート86号 1960年 安保闘争。平和集会
では国際的要人からも注目が集まる。
- ⑦・レポート87号 1963年(1)
インドネシア訪問日本文化使節団の公演記録
- ⑧・レポート88号 1963年(2)
ユートピア新制作座文化センター設立。
- ⑨・レポート89号 1964年
ユートピアの破綻・劇団員・従業員の首きり。
- ⑩・レポート90号 1965年(1)世の中から捨てられた
若者たち

【第3部】生まれ変わって

- ⑪・レポート91号 1965年(2) 新しい生き方を
探して
- ⑫・レポート92号 1969年 最初の試練
- ⑬・レポート93号 1970年 新しい劇団をつくらう

⑭ 稽古場建設と映画「同胞（はらから）」

【またもや行く手を塞がれて】

◆話し合いの成果が出たところで

1969年後半から70年は前号で紹介したように、みんなで話し合いを重ね、実際の工場で労働を体験し、公演地も都市部を避けて農村を含む地方で公演を展開したから公演もスムーズに展開していた。

1971年を迎えた時点で構成員は90人。事務所や稽古場はまだバラック建築のまま、お客さんが訪ねて来ても応接する部屋もなかった。よし、いよいよ十周年を目指して本格的な稽古場を建てようということになった。当時の公演は自治体の公会堂か学校の体育館の仮設舞台が中心だった。だからせめて20人前後のスタッフが演出席から舞台をチェックし、最低限の照明器具を設置できる稽古場が欲しかった。

◆稽古場建設は困難

1972年、ところがとんでもないニュースが飛び込んできた。周囲にどんな住宅が建てられているので、若者の出入りで騒々しい劇団は立ち退いて欲しいという署名運動が行われているというのである。あわてて役所に問い合わせると、この一帯は東京都の建築条例の変更で来年（1973年）6月から住宅2種地区となり、2階建ての民家しか建てられないという。

いろいろ地元の関係者に相談してみたが、「気の毒だが、劇団の望む稽古場は来年6月までに出来なければ建てられなくなる」とのこと。

これでは十周年どころのさわぎではない。どんどん住宅が密集して、さらに苦情が出てくるだろう。近所

の人に集まって貰って話し合ってみたが、どうやらみな内心は出て行って欲しいと思っっているようだ。

◆土地代の借金はせつかく返済できたのに

1967年にこの土地を購入した負債1400万円は、昨年までに全部返済できたところだった。資金はすべて公演活動と零細な寄付金を貯めたもので、やっと自分たちの稽古場が出来ると、目の前の菜の花畑の空き地で、みんなで記念写真を撮りバンザイと叫んだばかりだったのに……。

せめて音の出る稽古場部分だけでも地下に埋めてはどうかとも考えたが、建築会社に相談すると基本部分だけでも6千万円以上はかかるという。とても無理だ。またここを出て行かなければならないかもしれない。

◆小さい規模に分かれてでもやり直そう

みんなで話し合った。まだ創立して6年。社会人としてはあまりに未熟なため、目の前のことしか考えていなかった。やはりまだ「新制作座に対する怒り」から抜け出ていなかったのだ。内心、「新制作座より立派な劇団をつくってやる」と燃えていたけれど、やはりそれは危ない。逆に小さくてもいいから、追い出されて良かったと思えるような仕事をしよう。そうすれば大きな稽古場は要らないかもしれない。

◆30人規模を基礎にしよう

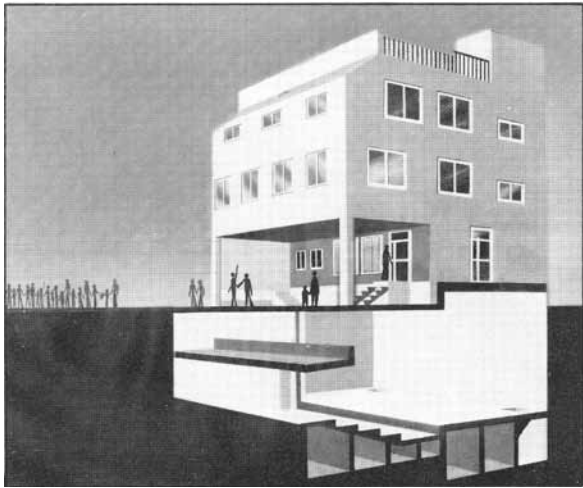
争議団になってからはなんとなく30人程度に分かれて自由に活動している。少々面倒な問題も30人程度で知恵を絞れば何とかなる。万一の場合はそれぞれ独立して行けばいい。争議団で出発した時、「将来、気の合う者同士で新しいチームを作ってもいいことにしよう」と確認していたはずだった。

【思いがけない展開】

◆構造体だけなら簡単にできる

1973年1月、劇団が困っている話は地元では早くから噂になっていたらしい。知らなかったのは自分たちだけだった。「統一劇場を支援する会」の人から、劇団と協力できる建築会社があるから是非会ってみたらいいと紹介してくれた。その会社は公共建築を専門にする会社で官庁が相手だから、今ちようど年度替わりで、運転資金が必要らしい。

そこでその会社の社長と会ってみた。6千万円かかると言われたときの設計図面を見せながら率直に稽古場の話をした。彼らが必要とする運転資金については、2千万円までは現金を用意できると言くと、「助かった。あなたがたが見てくれを気にしないなら、うちに橋梁用の鉄骨が余っているから、それを使って地下2階、地上3階の構造体ならすぐ出来ますよ」と言う。それに「今の



★消えて無くなるはずだった劇団稽古場が、住宅街のど真ん中に突然姿を現した。その名も「統一劇場会館」。舞台の下は上下(かみしも)の回り込み通路と楽屋。

うちなら地下工事で掘削する土砂は東京湾の埋め立てに使用されるが、来春からは千葉県まで運搬しなくてはならないから、これまでの倍以上の費用がかかる」という。

彼らの意見では外装はモルタル壁で十分だし、劇団ならセットの造作くらい経験があるだろうから、天井や内装は自分たちでやればいい。外壁のモルタル壁までなら2千5百万円程度でできると言う。これは有りがたかった。それに内装や天井は自分たちでやれるということ、みんなは張り切った。

◆1973年6月までに無事完成

工事はあつと言つ間に始まった。あれよあれよという間に地下部分が掘削され、地上には3階分の太い鉄骨が立てられ、周囲から目立つ工事となった。ついに外装だけは6月までに完成した。住宅街の一角にありながら、わが本部稽古場だけは最後の準工業地区建造物として特別承認された。まさに奇跡的な出来事だった。

◆館内の設備

この地下ホールは天井までの高さが5.5メートルあり、舞台部分の奥行きも5.7メートルあり、客席を100席分確保しても中ホール並みの空間が出来る。照明器具も自由な場所に設定出来る、舞台の床下は更に1階分掘り下げられ、俳優の通路兼楽屋になる。

地上1階は待ち合いを兼ねた事務所。洗面所や浴室も十分な広さが確保されている。

2階の広い食堂はちょっとした講演会場になるし、隣接して応接室、資料室、会議室など。

3階は多目的に使用できる広い和室と劇音楽の録音が出来る録音スタジオ。来客用の宿泊室、浴室。部分的に余った空間には代表・木村の小さな部屋、写真フィルムを現像する暗室、誰でも一人で作業できる個室など。

◆演奏者たちに喜ばれた録音スタジオ

特に録音スタジオは劇音楽の演奏者から喜ばれた。防音対策が施され、録音設備も完備。ピアノが常備され、10人内外のアンサンブル演奏が即座に録音可能だ。それまでは使用料の高額な都心のスタジオを予約しなければならず、演奏者たちも演奏録音のスタジオでは苦労していたのだ。

◆まるで夢のようだった

内部は荒づくりだが基本の設備は完備しており、公演の合間を縫ってみんなで天井を張り、気に入つた素材で内装し、必要な棚類を取りつける。屋上からは小金井市が一望でき、すぐ近くに中央線を走行する電車が見え、遠くに富士山が見える。

小さな集団に別れてでも耐え抜こうといった決意はどこかへ吹き飛んでしまった。

◆再び資金借入運動の展開

新劇界でも稽古場の確保は大きな問題で、これだけの設備を借りると月50万円以上かかるのが相場だった。1400万円の土地代を返済できたのも、月30万円を覚悟して積み立てていたからだ。

今回はすでに建設費2000万円を預けており、残り1500万円を集めることになる。もう一度全員初心に帰って、全国の支持者に5年期限で借入をお願いして歩くことになった。たとえ借りられなくても、自分たちの目指す劇場活動の経過を報告して歩く機会にした。

当時は銀行からの借入は月6%の利息を支払う時代だったから、支持者からの借入にも月6%の利息をつけて返済を続けた。そのことによって支持者との結びつきもいっそう強くなった。

【1975年『同胞』(はらから)】が生まれる】

◆山田洋次監督来訪

話は前項より少し遡るが1971年6月頃、突然松竹の山田洋次監督が木村の下宿に訪ねてこられた。統一劇場の招待公演で『希望』を観て、新劇の舞台とは違って、劇場全体が共鳴している。どんな活動をしているのかぜひ聞きたいという。

下宿は6畳一間で、とても話の出来るような場ではない。あわてて稽古場へ案内したのだが、稽古場にもちゃんとした応接間はない。居合わせた十数人がびっくりして、大急ぎで事務所を片付け、山田監督を迎えたことを思い出す。

1975年・松竹映画80周年記念映画『同胞』
「統一劇場」が実名で登場する不思議な劇映画。
・毎日映画コンクール優秀賞・美術賞
・タシケント国際映画祭ウズベック青年組織委員会賞



「同胞」と素晴らしい若者たちとの出会い

山田洋次

いまから三年前、わたしは偶然、ある小さな無名の劇団の公演を観た。それは、わたしたちが久しく忘れていた昔の村芝居に近く、いままでのどの新劇にも商業演劇にも属さない、実に素晴らしいものだった。舞台上で演じられる素朴な劇の一つ一つに対する観客の反応が、また驚くべきものであった。観客は、大声で笑い、涙をポロポロ流し、わたし自身も舞台に引きずり込まれ、ほんとうに素晴らしい体験だった。観客と舞台が一つに溶け合ったその様子に、「ああ、芝居というのは、こういうものだったのだな」という感動に包まれたのである。観終ってわたしは、いったいどうして、こういう芝居が出来たようになったのだろう、と考えた。ひとりの優れた作家がいて、あの素晴らしい舞台を作り上げたのではない。彼らの歴史の中から、彼らの観客の拍手の中から生まれて来たものではないか、と思ったのである。

彼らは、小さな村や町をずっと歩いて、ほんとに小さな村で、八百人も九百人も人を集めて公演をする。そのようなことがどうして可能になったのだろう。わたしは最初、それがどうしても見当がつかなかった。青年たちが、なぜそのようなことに一生懸命になるのか、ということが。そこでわたしは、彼ら「統一劇場」の若者たちにくっついて、実際に田舎の村を歩くことにした。

わたしがいま取り組んでいる「同胞」は、彼ら「統一劇場」のメンバーと、農村に在る若者たちとの心の交流を描いたものである。田舎の小さな村に、ある日、まるで夢のようなことをいう女性が現われる。芝居を

やるうという。そんなことは出来るわけがない。一晩で六十五万円という金が掛かる。そんな馬鹿馬鹿しいことがと。ところが、気が付いてみるとみんな夢中になって、そのことに駆けずり廻り出していた、という話である。

この映画に実名で出てもらった「統一劇場」は、東京の小金井にある劇団で、演劇の公演だけで劇団員九〇名が生活しているグループである。公演のほぼ半年程前から、組織部員が公演予定地に出かけてゆき、毎日毎日歩き廻り、土地の青年たちに会い、話し合い、そこに公演の実行委員会を作ってゆく。公演が近づくと、一週間も十日も前から、青年たちはほとんど夜寝ない位に走り廻り、一軒一軒、切符を売って歩くのである。それを彼らは、昼間働きながらやっている。人口が四千人の村で、千人も集めたことがあった。それは、老人も子供も、主婦も青年も、村中の人が、もうみんな彼らの公演を観に来るようなものである。わたしは、彼らとともに地方を歩きながら、劇団員が観客と土地の青年たちに寄せる強い信頼に触れたのだった。

人間に対する信頼、それは必ず相手の心を打ち、一つの目標に向かって気持をかき立て、彼らを夢中にさせてゆく。観客に嬉びを、それがそのまま自分たちの嬉びである。という気持が若者たちの連帯感にまで昂まっているのである。

人間が、あることに事中になるということは、いったいどういふことなのか。夢中になって何かをやる、という状態が幸福というものではないだろうか、ということわたしは、この映画で描いてみたいと思っている。

(キネマ旬報一九七五年10月下旬号より転載)

【以下 次号】

ハトノスの活動について 公演『始発まで』を振り返って

青木文太郎



青木 文太郎

2021年頃より正会員として現代座の活動に関わっている青木文太郎です。現代座での活動と並行して、「ハトノス」という団体の代表として演劇活動を行っており、『武蔵野の歌が聞こえる』の1週間前、現代座ホールにてリーディング公演『始発まで』を上演しました。

ハトノスはこれまで戦争などの過去の出来事と、それらの現代での語られ方に注目しながら、「歴史と記憶」について扱った演劇を製作してきました。私は脚本・演出・音響・照明などいろいろなことを担当しています。

ハトノスの作劇では私の出身地である広島県の歴史を扱うことが多く、過去には被爆2世・3世の原爆との距離感を描いた『忘れ果てて』、広島県の大久野島の毒ガス製造がおこなわれた戦時中の歴史と、「うさぎの島」として観光地になっている現在に焦点を当てた『毒の島には近づかない』などを上演してきました。

今回上演した『始発まで』は、広島県の路面電車と原爆の歴史を扱いながら、記憶を語り継ぐことに伴う葛藤を描いた作品です。2019年3月にハトノス旗揚げ公演として現代座の3階で上演したものを、今回リーディング形式で再演しました。

戦時中、男性が兵隊にとられていき広島の路面電車も男性乗務員が不足していく中、代わりに路面電車の乗務員となったのは、14〜17歳の女学生たちでした。

原爆投下によって広島市内の路面電車も大きな被害を受けますが、懸命の復旧作業の末わずか3日後の8月9日に一部区間で路面電車の運転が再開され、その電車も女学生たちが動かしました。焼け野原となった街を走る電車は、広島の人たちを勇気づけたといえます。

『始発まで』はこうした広島県の歴史について、「当時の広島電鉄の職員」や「現代でガイドをする青年」など、様々な視点から見つめるお話です。

今回のリーディング公演では、劇中の一部シーンで事前公募した一般のお客さんにセリフを読んでもらう、という取り組みを実施しました。これは、「記憶」や「証言」と向き合ってきた中で、通常の観劇ではなかなか得られない体験をお客さんと共有したいな、と思って企画したものです。お客さんに読んでもらったのは、女学生たちの日常や、原爆投下当時の回想です。おそらくお客さんのほとんどは「1945年8月6日の広島」を直接体験していない人だと思うのですが、俳優でない人の読みを通して、今を生きる私たちなりの「実感」ができるような劇場が作りたかったのです。

俳優は初演の時のメンバーがそのまま集まり、更に現代座でもおなじみの木の下敬志さんを加えた5名が出演しました。少ない稽古の中で、各々がしっかりと作品と向き合い、素晴らしい演技を見せてくれました。そして一般参加には現代座から長谷川葉月さんの朗読教室の生徒さんも多く参加していただきました。皆さんの声のおかげで、この作品の持つ力を改めて感じさせていただきました。

原爆などの伝承活動を実践されている檜原泰一さんや沢村智恵子さん、天野佳代子さんを招いて「アフタートーク」を実施する等、団体として初めての試みも実施しました。観に来ていただいた方にとって、なにがしらの良い時間になっていれば嬉しいです。

現代座の方をはじめ、本当に多くの方の力を貸していただき、無事公演を終えることができました。現代座の公演を通じて「お客さんと共に「劇場」を作る」という考えに触れてきたからこそ今回の公演を実現できたと思っております。機会がありましたら、ハトノスの公演をご覧になっていない方もぜひ見に来てください。



お知らせ

TEL : 042-381-5165
FAX : 042-381-6987NPO 現代座 次回公演
わすれものはありませんか
武本英之作

(2008年上演の舞台)

日時 : 2023年9月30日～10月1日(予定)
会場 : 現代座ホール ・詳細は次号でスタジオ・ポラーノ 公演
体験する童話劇 銀河鉄道の夜日時 : 2023年8月20日(日) 14:00
会場 : 現代座ホール
入場料 : 2500円

* 小金井市にお住まいの方は500円割引

現代座会館 3月～5月 活動日誌

3月4日～4月5日 1Fトイレ改修工事

21日 「現代座レポート93号」 発送作業

4月6日 「平右衛門フエスタ」 実行委員会に参加
第3木曜日 「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

3月2・4・6・8日 「スタジオ・ポラーノ」 稽古

16日 「演劇ユニット Nagakure」 公演

22日 「劇団獣甲」 公演

27日 「青春の庭のうさぎたち」 公演

31日 「劇団アルファ」 公演

4月15・22・29日 「ハトノス」 稽古

16・17・23・24日 「NPO現代座」 稽古

26・27日 「誰でもできる朗読教室」 発表会

5月7日 「ハトノス」 稽古、公演
26日 現代座 「武蔵野の歌が聞こえる」 公演

【二階小ホール】

3月5日 津田 「リトルコンサート」

4月9日 「山本タンさん、またねパーティ」

5月5日 「リトル銀河」 稽古

14日 「NPO現代座」 稽古

24日 「希望舞台」 稽古

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

【二階サロン】

3月1日 現代座企画会議

4・11日 「劇団獣甲」 稽古

20日 NPO現代座総会

25日 緑町第2町会役員会

4月3・10日 現代座稽古

23日 緑町第2町会役員会

5月7日・20日 緑町第2町会役員会、総会
毎水曜日 熟年パソコンサークル

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円
 協賛会員 10,000円(1口以上)
 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座